



ザ・ビートルズ

The Beatles

1960年代イギリスの港町から彗星のように現れたビートルズ。全世界で売り上げたレコードは累計10億枚。キャッチーなメロディー、巧妙な作曲技法、洗練されたハーモニー、音楽的な才能と革新性をもった4人組。彼らはポップミュージックの枠を超えて、さまざまなジャンルやスタイルを取り入れ、独自のサウンドを生み出した。

またビートルズの歌詞やメッセージは、愛や平和、自己表現、社会的問題など、幅広いテーマを扱った。彼らは時代の風潮を反映し、若者たちの共感を呼び起こし、また社会的な変化を促し、文化的なインパクトを世界レベルで成し遂げた。さて今回は、ビートルズの8年間にわたる音楽活動シーンから、いま私たちは彼らから何が学べるのか、検証したい。

ジョン・レノンに起こったアウフヘーベン

ジョンとポールとの出会いは、1957年7月ジョンが地元教会のイベントにバンド出演したときだった。ポールは友人に誘われて、その場に足を運んでいた。初めての対面、二人は大好きな音楽の話で盛り上がり、ポールは、そばにあったピアノに向かい歌い出した。当時アメリカで流行っていた『のっぽのサリー』だった。その完成度にジョンは驚き、バンドメンバーに誘った。



その時の心境をジョンは後にこう振り返る。今のメンバーよりも明らかにうまいやつを仲間に入れるべきか、止めるべきか。グループを強化するのか、それとも自分の地位を強化するのか。僕の決断は、ポールを仲間に入れ、グループとしてのレベルを上げるというものだった、と。

人の心理は、ときとしてエゴが仕切る。もしその時ジョンが、自分より明らかにスゴイ奴がグループに入ったら、自分の立場が危くなる。それなら仲間に入れない、という選択をしても何らおかしくはない。しかし、その時ジョンにアウフヘーベン（止揚）が起こった。自分のエゴを解かし、グループとしてより高い次元へ上る選択をしたのであった。この選択がなかったら、ビートルズは存在しない。



鶴の目、亀の目

グループが成功するためには、全体を見ながら（鶴の目）、プロモートしてゆく役割・マネージャーが必要となる。その人の名は、ブライアン・エプスタイン。彼はビートルズのキャリアを、イギリスの港町から世界的なスターダムへと導く役割を果たした。彼はビートルズのスーツを変え、髪型を整え、プロフェッショナルなステージパフォーマンスを確立することに注力した。ステージでは、一曲ごとに深くおじきをするまで、提案している（亀の目）。

周知の裏話として、エプスタインはホモであり、ジョンの荒々しい粗野な性格に抑えがたい魅力を感じ、マネージャーを引き受けたという。しかし残念なことに、2人は接近したが、結局エプスタインの「思い」は実らなかった、と後年ジョンは語っている。（金星堂『ビートルズの世界』より）

<事例>

米映画『ある愛の詩』1970年、モーツアルト、バッハ、ビートルズ
 ジョン・レノンのアウフヘーベン（止揚）、映像の世紀より
 鶴の目・マネージャー・ブライアン・エプスタイン、大局をみる
 心理学者ユング、元型・光を生きるビートルズ
 ジョン・レノン『マザー』を歌う、影の迫力、
 息子・ショーンには、父ジョンの迫力はない、影がないから
 ジョンとヨーコの出会い、ロンドンの展示会場で、天井に“Yes”
 レノン暗殺、1980年、犯人・マーク・チャップマン/承認欲求
 歌・ポールマッカートニー『ハイ・ジュード』Hey Jude

